

# 森の木魂（こだま）

2025年1月24日発行 第14号

## 目次



・地球を守る活動こそ命を繋ぐ道 …………… 1	・足尾・松木郷を訪問・森の命を感じて！ …………… 14
・奇跡を生み出した20年の森づくり…………… 2	・森を育て広めていく重要性を学ぶ…………… 15
・気候変動の問題はどうなっているのか …………… 6	・足尾の繁栄と荒廃の歴史を繋ぐ「孤高のブナ」…………… 16
・たかが20年されど20年/自然共生の感性を磨く …………… 8	・「孤高のブナ」保護活動の感想…………… 17
・南海トラフ地震と原発/100年の森を目指して…………… 10	・宮城県でつなげるいのちの森づく…………… 18
・いのちを守る森づくりを！/情報は「相互作用」の時代へ…………… 12	・いのちと生活を守ることを真剣に/お知らせ・編集後記…………… 19

## 地球を守る活動こそ命を繋ぐ道

新年あけましておめでとうございます。

昨年元旦の能登半島地震から1年が経過いたしました。しかしながら、石川県の被災者はいまだに20,000人を超える人々が避難生活を強いられています。また、東日本大震災から14年が経過しようとしています。被災地では極端に人口が減少し、高齢化が進行しています。首都圏では夜中煌々と光が輝く一方、地方では鳥獣被害が日常化し高齢者が必死な生活を強いられています。このような状況で良いはずはなく、日本はどこに住んでいようとも同じ幸せを感じられる国でなければなりません。

世界に目を向けると、ロシア・ウクライナ戦争が継続し、イスラエルとガザ地区の紛争が続き、イスラエルによるレバノンへの攻撃が激化し、多くの命が失われています。アメリカでは自国第一主義のトランプ大統領に政権が誕生し、ヨーロッパの多くの国では政権交代が続いています。

地球の各地では温暖化による異常気象で、気候変動が激化しています。人間は何のために地球に生まれ、何のために生きているのでしょうか。経済発展優先のもとで、貧富の格差が拡大し、地球環境は汚染され、温暖化が加速し多くの命が失われ、地球上のあらゆる生命が危機に瀕しています。

そのような中、森びとプロジェクトの森づくりは20年を迎えます。これまで活動に携わってこられた皆様方に心から感謝と敬意を表します。小さな活動が森を蘇らせ、命の営みを作り出しています。人が生きていく原点が森びとプロジェクトの活動に凝縮されていると思います。

東京電力福島第一原発事故は日本に何を啓示した

のでしょうか。地震列島日本では原発とは共存できないということではなかったのでしょうか。原発回帰ではなく、緑の資源を守り、地球を守る活動こそ命を繋いでいける道だと信じて、今年も地道な活動を続けていきましょう！

森びとプロジェクト会員の皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

運営委員会代表 桜井勝延

### 【運営委員会】（順不同）

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



#### ●アドバイザー

- 森づくり：高橋佳夫
- 政治：山崎 誠（衆議院議員）
- 科学：倉澤治雄（科学ジャーナリスト）
- 植生：中村幸人（東京農業大学名誉教授）
- 森林：川端省三（法人職員）
- 広報：大山寛恭（ジャーナリスト）

#### ●運営委員

- 代表：桜井勝延（南相馬市議会議員）
- 副代表：清水 卓（法人職員）
- 運営委員：井上 康（法人職員）
- 運営委員：大野昭彦
- 運営委員：小黒伸也（会社員）
- 運営委員：小林 敬（会社員）
- 運営委員：田城 郁

#### ●会計監査員

- 監査員：笹沼信男（会社員）
- 監査員：梁島幹雅

特集・森びと20年  
奇跡を生み出した20年の森づくり



20年間の森づくり活動によって荒廃地に蘇りつつある森の記録

## ■「失敗」を「知恵」に変えてきた 20 年

2004年、地球温暖化が危惧される気候下で、足尾銅山の煙害によって荒廃した山裾に立った宮脇昭横浜国大名誉教授は、現地の土壌調査と植生調査を行い「厳しい条件で生き物は実力を発揮する。本気でやるのであれば協力する」と述べ、JR東労組委員長松崎明氏、ジャーナリストの岸井成格氏とスクラムを組み、2005年5月、「地球温暖化と環境破壊」を食い止めるために「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」がスタートしました。



苗木を支える竹が「卒塔婆」のように立つ白沢の急斜面での植樹は、植樹をするための土台づくりから始まり、660段の階段作り、動物による食害防止の獣害柵づくり、酸性土壌を改良するための黒土・

腐葉土の荷揚げなど、森づくりに賛同した多くのボランティアや小中高校生、JICAなど多くの“森とも”の協力を得て植樹を行ってきました。雪が積もる冬は獣害柵が破られ、植樹した幼木がシカやウサギの格好の餌となりました。厳しい自然の中で命をつなぐ生き物たちの凄さを知り、人間の都合に合わせた森づくりは出来ないことを学びました。



失敗を繰り返しながら、森づくりスタッフとの話し合い、実践を通じて「失敗」を「知恵」に変えてきた20年でもありました。



植樹地全景

■「母なる森」を目指して！

樹々が生長するにつれて、生き物が増え、虫を食べるトカゲやヘビ、鳥やアナグマ、イノシシなど多くの動物たちが森で暮らすようになりました。クリやドングリの実、アリの卵を食べるツキノワグマも森の一員となりました。また、風や鳥のフンと一緒に森の中に種が撒かれ、自然界が森づくりを応援してくれるようになりました。

森に入ると猛暑でも涼しく、林床には緑の苔が敷き詰められています。落ち葉は土の下に住む動物たちが栄養豊かな土壌へと変えてくれます。落石の多かった斜面では木々が根で抑え、雨を吸収した森は新緑や紅葉など季節ごとに彩られた情景を育み、松木郷に広がる森が安らぎを与えてくれます。



土台作りと森の手入れに汗を流す、森びとスタッフと森ともたち、そして様々な顔を持つ森

■ 森の再生は多様な生き物たちの故郷になった



ヤマユリ



フデリンドウ



アナグマ



イノシシ



ウグイス



フクロウ



ヒョウモンチョウ



オオシオカラトンボ



シロガネスミレ



キジ



サル



ニホンジカ

自然が加勢して森の仲間が増えました

「地球温暖化にブレーキをかける」森づくりは、地球上では極めて小さい森ですが、温室効果ガスを吸収し、生き物たちが暮らす命の森へと生長しています。一方で、生存基盤である地球環境は「地球沸騰化」から、世界の「気候崩壊」が止まらない時代へと突入しました。これまでの暮らし方ばかりではなく、自然環境や社会関係の概念から転換が求められています。生存が不安定な生活から逃れるために、私たちは何をしなければならないのか。



2025年は、森づくりをボランティア活動や財政的に支えて頂いた皆さまに20年の森に入っただく「エコ散歩 in 足尾」を開催し、多様な生き物が暮らす森を観察しながら、この地球上で生きていくために、自然環境と人とのつながりや人間は森に

生かされていることを考え、アクションへとつなげていきます。

また、20年の森づくりを振り返り、親子・家族で「かるた」を楽しみながら、自然環境と人とのつながり、森の草木に触れ森に寄り添って生きていることを体感できるような、「森は友だち！」カルタを制作します。森づくりや自然に触れ、体感・体験したことや知ったことなどを句にいただき、読み札の言葉を応募します（応募の詳細は裏表紙をご覧ください）。



今後も“山と心に木を植える”を合言葉に、この小さな森を『いのちを守る「母なる森」へ』と手入れを行い、自然環境と人とのつながりを大切にする心を育んでいきます。

運営委員会副代表 清水卓

特集・森びと20年

気候変動の問題はどうなっているのか



20年前、私たち森びとは「ストップ！温暖化」をその合言葉の1つとして活動を開始しました。しかし、その願いも空しく、今では「地球沸騰化」や「気候崩壊」（国連・グテーレス事務総長）という言葉で語られるほど状況は深刻になってきています。

地球温暖化により気候が不安定化する気候変動についてはすでに多くの報道や解説があり、私たちの身近なところでも、その因果関係は確かめようがないにしても何らかの影響を感じている人がほとんどではないでしょうか。昨年を振り返るだけでも、気候変動に深刻な影響を受けた災害報道は枚挙にいとまがありません。能登地震の被災地では傷が癒える間もなく1000年に1度の豪雨による被害が発生し、夏の猛暑では各地で命が脅かされる事態も起きています。

ここでは、最新の気候変動の状況と、この喫緊の課題に立ち向かうため、私たち森びとが次にどのようなアクションをすべきなのかを考えるための材料をまとめてみようと思います。

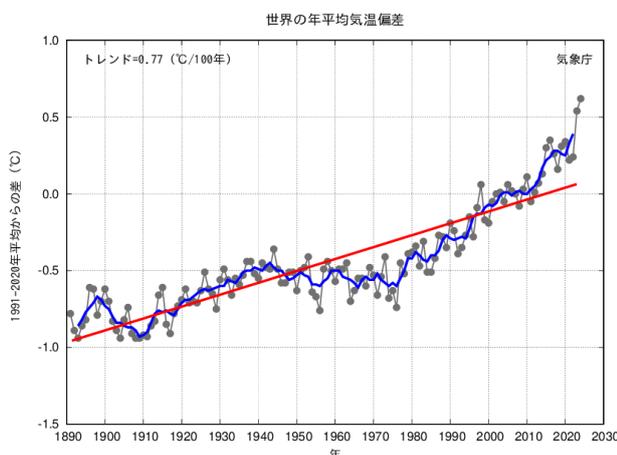
運営委員 小黒伸也

●2024年は観測史上最も気温が高い年に

欧州連合（EU）の気象機関は、2024年9月、この年の世界の平均気温が観測史上初めて「産業革命前と比べ初めて1.5度を超えた」と発表しました。（コペルニクス気候変動サービス）

1.5度とは2015年のCOP21で採択されたパリ協定で示された気温上昇の抑制目標値です。この温度を超えた時点で、温暖化が連鎖的に進み、極端な気象が増加するようになり、人間社会のみならず生態系システムがより深刻なリスクに直面すると言われています。

この平均気温は一時的な自然変動であり、長期平均ではまだ1.5度を超えてはおらず、これをもってして目標気温を超過したとは言えないとは伝えられています。とはいえ、2024年は観測史上最も気温が高い年となり、すでに崖っぷちにきているのは間違いないでしょう。



世界の年平均気温偏差（気象庁）

1. インドの熱波（年初頭）

記録的な熱波が発生し、特に北部地域で気温が40度を超える日が続いた。この異常な高温は、農作物の不作を引き起こし、食料価格の高騰を招いた。

2. アメリカのハリケーン（夏）

アメリカ南部ではハリケーンが上陸し、特にフロリダ州で大規模な洪水が発生。このハリケーンは、強風と豪雨を伴い、多くの住宅が浸水し、インフラに深刻な影響を与えた。

3. ヨーロッパの異常高温（夏）

ヨーロッパ全体で異常な高温が観測され、特に南部では40度を超える地域があった。この高温が、森林火災の発生を助長し、特に地中海沿岸地域で大規模な火災を発生させた。

4. アフリカの干ばつ

サハラ以南の地域で深刻な干ばつが発生。農業に依存する地域で食料不足を引き起こし、数百万人が影響を受けた。

5. 日本の豪雨（秋）

記録的な豪雨が発生し、特に北陸・東北地方で大規模な浸水被害があった。この豪雨は、河川の氾濫を引き起こし、多くの住民が避難を余儀なくされた。

2024年の異常気象による代表的な災害

●COP29の開催、気候変動を直視できない国々

気候変動問題に関する世界最大の会合、COP29（国連気候変動枠組条約第29回締約国会議）が、2024年11月11日から24日までアゼルバイジャンのバクーで開催されました。上述の平均気温の発表はその前に行われており、現状はどの国も理解している上での開催です。この会議での主な議題は途上国への気候資金援助でしたが、途上国側が求めている額には程遠い合意となりました。

気候変動対策のための金額が不十分なうえ、資金の原資が曖昧で、実行可能性に疑問が残るといった課題が残り、各国の思惑による国際的な協力の欠如が露呈しました。また、気候変動の影響は、特に脆弱な地域において顕著であり、これらの国々は気候変動に大きな責任がないまま、その影響を最も強く受けています。これらの国々への配慮が足りていないことも大きな課題としてクローズアップされました。各国が気候変動を直視しないまま閉幕したという印象がぬぐい切れません。そしてそれは日本も例外ではありませんでした。

### ●気候変動をめぐる日本の動き

日本のCO2排出量は世界5位、ところがその削減目標は世界をリードするには程遠く、一昨年のCOP28で確認された水準を下回る素案を提示しています。COP29においては、その温暖化対策の消極性ゆえ二度も化石賞（うち一つは特大化石賞）を授与されました。

日本各地の台風被害や水害は年々その数を増し、被害も甚大になりつつあります。何に注目するかにもよりますが、気候変動による「リスクの高い国」の4番目として日本を挙げている調査もあるほどです。日本においても気候変動の対策は待ったなしであり、すでにこの地球上、気候変動の破壊的な影響を避けられている地域はありません。それなのに対策は後ろ向きだというのは何故なのでしょう。できるだけ目先の経済に影響がないようにうまく立ち回り、そのうち誰かが何とかしてくれる、という無責任さは、原発を巡る我が国の基本的な考え方にとっても良く似ています。気候変動対策は早いほうが良いというのは、科学的な合意に基づく重要な見解です。対策が遅れることで多くの弱き人々に影響を及ぼし、仮に私たちの世代での影響が少ないものだとしても、そのツケは間違いなく次の世代に回すことになるのです。今の日本の政策を決めている人たちは、本当に「我が亡き後に洪水よ来たれ！」とでも思っているのではないのでしょうか。

### ●私たちにできること

気候変動は、私たちが思っているよりも急速に進んでいます。すでに発生している大きな問題をいち早く抑制するためには、今こそ集団で大きく行動す

ることが必要です。

昨年夏、全国の若者16人が、二酸化炭素(CO2)排出削減を求め、国内の火力発電事業者を提訴しました。彼らにあったのは将来世代の人権が侵害されるという強い危機感だったと言います。同10月、「気候アクションウィーク」で「地球のため わたしのため」と題したイベントを主催した「ワタシのミライ」は、「地球と共にある暮らしは我慢することではなく豊かな喜びにあふれていることを伝えたい」との趣旨でイベントを開催しました。日本の若い世代も着実に行動しています。そうした点と点を結んで大きな面へ広げることがまず必要とされていることではないでしょうか。



気候変動に対する個人の行動は、単なる自己満足に留まらず、社会全体に大きな影響を与える可能性があります。個人の小さな行動が集まることで、企業や政府に対しても変化を促す力となります。国連の「**個人でできる10の行動**」では、個人の行動が気候変動対策において重要であることが強調されています。誰かのリードを待っていても、いま誰かの責任を問うても始まりません。私たちの多くが「今だけここだけ自分だけ」の生き方に賛同せず、その舞台にいる人たちを賞賛することも、憧れることもなくなれば、大きく未来は変わっていくはずですが。そのためにできることを、常に考え、大きく声を上げ、そして実行していくことがいま求められています。

#### 国連「個人でできる10の行動」

<https://www.unic.or.jp/files/actnow.pdf>

- ・家庭で節電する
- ・徒歩や自転車で移動する・公共交通機関を利用する
- ・野菜をもっと多く食べる
- ・長距離の移動手段を考える
- ・廃棄食品を減らす
- ・リデュース、リユース、リペア、リサイクル
- ・家庭のエネルギー源を替える
- ・電気自動車に乗り替える
- ・環境に配慮した製品を選ぶ
- ・声を上げる

特集・森びと20年

たかが20年されど20年



足尾・松木沢の荒地に木を植えて20年が経つ今年。その森は分かり易く言えば100m×600mの面に8万本の木が植えられています。2年後には岩手県八幡平市の松尾鉾山跡地での森づくりも20年を迎えます。木々の樹高は10mを超え、幹の直径も20cmを超えています。小さな森は四季折々にその美しさを私たちに恵み、この森で今ではカモシカ、ツキノワグマ、ニホンシカ、アナグマ、ニホンザル、野ウサギ、イノシシ等の動物をはじめとした生きものたちが命を繋いでいます。2005年の植樹場所の東側はニセアカシアの林がありますが、その部分は大雨が降ると土砂が流されて下部の柵に土砂が溜まっています。しかし、私たちが育てている森内では土砂流出の跡は見当たりません。

生涯を植物と森づくりに捧げた森づくりの恩師でもある故・宮脇昭さんには“たかが20年ぞ！”と言われそうですが、足尾・松木沢の森はこの20年で命を守る森に育っていると自負しています。白神山地の森や明治神宮の杜（森）から足尾の森を観れば“たかが20年”と言われて当然ですし、地球温暖化による異常気象の猛威に森の機能は果たせるのかと言われると、森の木々は下を向いてしまうかもしれません。



“地球温暖化にブレーキをかけられないか”と願って、山と心に木を植えてきた20年間。森づくり活動などを考えても見なかったド素人たちの20年間は、人間は自然環境と人とのつながりの延長線上で生存している一員にすぎないということを学び、それは現代人の活動スタイルの見直しを突き付けられている私たちの生存戦略を思考する力になっています。



足尾・松木沢の森へ向かう途中には銅の精錬滓の堆積場があります。足尾の銅操業は今年で150年を迎えるそうですが、草木が生えないこの堆積場の草地にはヤシャブシが2本だけ生きています。幹の太さから推測すれば樹齢100年以上です。重金属を含む荒地を放置してきた地に生きているのが不思議です。このヤシャブシを過ぎると、私たちが荒廃地を耕し、少しばかりの土を混ぜた土壌に苗木を植えてきた「民集の杜」があります。



「滓の堆積場」～「荒廃地を放置してきた地に生きる木」～「人が手入れした荒廃地跡に生きる木々」を見渡すと、自然環境と人間活動の「過去・現在・未来」が体感できそうです。この地の過去には田中正造と農民の健康と命を守るたたかいがあります。白神山地の森や明治神宮の杜（森）の歴史にも人間の森に寄り添う生活の抵抗があります。その上に微力ながらも私たちの森づくり活動をつないできました。そして、今後もこの志と情熱に揺らぎはありません。足尾・松木沢の森にはふるさとの木の実生が根を伸ばしています。母なる森の希望の種が芽吹くことが期待されます。心には森に寄り添う人の心得が育まれると思います。

最後に、森づくり活動の場を提供してくれている古河機械金属(株)さま、絶大な支援を継続しているJR東労組さま、長期間にわたり支援くださっているイオン環境財団さま、その他の団体、多くの植林ボランティアの皆さま、そして“森とも”の皆さまに心から感謝申し上げます。

森づくりアドバイザー 高橋佳夫

特集・森びと20年  
自然共生の感性を磨く



気候危機が深刻化しています。夏の暑さ、世界各地で発生する山火事、干ばつ、豪雨災害、氷河の流出等、後戻りできない変化が起きています。しかし、人類の生存を脅かす事態が起きていながらもかわらず、私たちはこの危機に対して国家間の利害や経済に縛られ無策を続けています。日本も先進国としての責任を果たすために2035年に向けて温室効果ガス削減について、少なくとも2019年比70%以上の目標を設定すべきところ、2013年比60%削減で済まそうとしています。問題を先送りにしたい古い産業界の主張を優先した結果です。

こうした対応の遅れの背後には気候危機への危機感の欠如、他人意識があります。私たち森びとプロジェクトが続けてきた森づくりの活動は、日本の気候危機に関して欠落する視点を与えるものとして重要な意味を持っています。

一つ目は、例えば足尾銅山の煙害で枯れてしまった森と向き合うことで、人間が自然環境を破壊してきたこと、その回復には大変な地道な活動が必要であることを実感することができます。人類が直面している気候危機も、我々人類の活動が地球環境に与える悪影響が積み重なった結果であり、足尾と気候危機は平行して考えることができる。そうした学び、気づきを多くの人たちと共有することが重要です。

二つ目は、気候危機対策において、CO<sub>2</sub>の吸収源でもある森の意義を再認識することに繋がっていることです。CO<sub>2</sub>吸収源としての森の機能をいかに維持し高めていくのか、森づくりの実践から多くを学ぶことができます。

気候変動対策というと、どうしてもCO<sub>2</sub>を排出する場面での脱炭素化という話になる。そこからは原子力発電への回帰のようなエネルギーを使い続けるための論議しか生まれてきません。我々はエネルギーに対する見方を抜本的に変える必要があります。吸収源である森や海、地球環境を守りながら、環境調和で持続可能な再生可能エネルギーをベースに、利用可能なエネルギー制約の中で生きていく、暮らしていくスタイルを築いてゆかなければなりません。



気候危機を真に受けとめるには、自然共生の感性、これを磨いていくことが必要だと思います。特に自然と距離を置いてしまっている若い世代、都会に暮らす人びとに、この環境意識、自然共生の感性というものを磨いてもらいたい。それを助けるのが私たち森びとプロジェクトに課せられた大きな使命であり、2025年の私の目標としたいと思います。

政治アドバイザー 山崎誠

特集・森びと20年  
南海トラフ地震と原発



2024年8月8日、「南海トラフ地震臨時情報」が初めて発出されました。十分な周知がなされないまま、巨大地震の臨時情報が出されたことから、ホテルのキャンセル、海水浴場の閉鎖など、地域経済や社会にも大きな影響を与えました。

「南海トラフ地震」とはフィリピン海プレートがユーラシアプレートに沈み込む境界で起きる巨大地震です。発生する確率は30年間で70-80%、死者32万人、被災者6,100万人、被害総額は214兆円に上ると予測されています。

懸念されるのが原発事故です。「南海トラフ地震防災対策推進地域」には浜岡原発、伊方原発、川内原発が含まれています。伊方原発3号機、4号機、川内原発1号機は運転中です。

日本は世界でも稀に見る地震多発地帯です。しかも2011年の東北地方太平洋沖地震以来、間違いなく日本列島は活動期に入っています。日本列島には2,000を超える活断層があり、どの原発も敷地内、あるいは敷地近傍に活断層が重層的に存在します。しかも地震は活断層がないところでも発生するのです。日本列島は原発を運転できる自然環境にありません。

昨年1月の能登半島地震では多くの家屋が倒壊し、大規模な火災が発生し、道路が寸断され、トンネルが崩落しました。能登半島の高齢化率はほぼ5割です。二人に一人が65歳以上の高齢者です。もし志賀原発が雪深い真冬に事故を起こしたらどうなるでしょうか？

事故が起きたら「屋内退避」することになっていきますが、退避する「家」はありません。避難所までは高齢者が高齢者を連れて行かなければなりません。その避難所のインフラも脆弱です。能登では停電の回復に3か月、水道の復旧に5か月かかりました。道路は雪で通行止めです。逃げることもできません。降り注ぐ放射能は雪に沈着し、人々は被爆します。

志賀原発だけでなく、日本のどの原発でもこうしたことが起こりうるのです。現在の規制基準は事故が起きることを前提にしています。

原子力規制委員会は昨年10月、「屋内退避」を解除する基準などを公表しましたが、机上の空論です。そもそも東電福島第一原発事故では何が起きているか、規制当局さえも知ることさえできませんでした。知らないどころか住民を放り出したまま、真っ先に逃げたのが当時の原子力安全・保安院の保安検査官だったのです。

山中伸介委員長は記者会見で「自然災害は規制委員会の範疇外」と発言していますが、原発事故は「地震」「火山」「津波」「竜巻」「火災」「台風」「豪雨・豪雪」と同時に起きる複合災害なのです。

巨大地震はいつ起きるか予測できませんが、必ず起きます。原発事故も必ず起きますと私は確信しています。その時日本がどうなるか、真剣に考えるべき時でしょう。

科学アドバイザー 倉澤治雄

特集・森びと20年  
100年の森を目指して



大気中の炭酸ガス濃度をこれ以上増やさないように、エンジン車から電気自動車への変更、石炭火力発電から風力、ソーラー発電など、クリーンエネルギーへの変更が世界的潮流として進んでいるが、果たして正しいのか。炭酸ガス濃度が増えて、過去に見られない勢いで気温上昇が起きているのは事実として、発生源を抑えていくことと合わせて吸収する能力を高めていくことが大変重要であると考えられる。さらなる危惧はクリーンエネルギーという名の振興が自然環境をダメにしているのではないかという恐れである。

クリーンエネルギーの最初は水力発電であった。上流部にダムを建造して河川をせき止め、エネルギーを得る。日本の河川は急流河川で、上流、中流、下流域には浸食・堆積作用に伴う異なる生態系が発達し、固有の生物相が存在する。例えば上流部では水温が低くて溶存酸素が多く、ナルコスゲ、ミズタバコ、ツルネコノメ、カワガラス、カジカガエル、イワナ、ヤマメが生息できる。中流では浸食と堆積が繰り返され、ネコヤナギ、カワラハンノキ、ツルヨシ、セグロセキレイ、アユ、モクズガニ、水温が上がり、流れが緩やかとなる下流域ではオギ、ヨシ、オオヨシキリ、コイ、マハゼが生息する。これら多様な河川生態系はダム湖の出現により大きな影響を受けた。

最近騒がれるメガソーラーは山林を切り拓き、森林生態系を破壊している。太陽電池はおよそ  $0.2\text{kW}/\text{m}^2$  の変換効率となるが、森林は可視光線から  $0.7\text{kW}/\text{m}^2$  のエネルギーを、光合成を通して取り入れている。さらに森林には水源涵養機能、バイオマス生産機能、土壌保全・砂防機能、生物多様性保全機能など、地球保全機能を備えている。クリーンエネルギーの風力発電も然りで、開発が大規模となるのは金儲けの手段となるからである。そもそも、二酸化炭素削減による温暖化対策だけがクローズアップされるのはそれが理由である。



二酸化炭素を吸収して酸素を吐き出す森林は、寒帯と極地と砂漠を除き、4億年の時間をかけて地球環境を生物の豊かな穏やかな惑星に変えてきた。その森が毎年、四国に匹敵する面積で失われている。長い時間をかけて到達した最も多様で安定した自然林は熱帯から亜寒帯まで、湿地から乾燥した岩場まで異なる環境の分だけで、多様な生態系を形づくっている。我々が今、すべきことは森を作ることであり、100年の時間があれば地球保全機能を高める森にできるのである。

植生アドバイザー 中村幸人

特集・森びと20年

いのちを守る森づくりを！



能登半島地震で発生した山地災害の一部を国の直轄治山事業として復旧することになり、担当する石川森林管理署を訪問する機会がありました。応急措置が完了し、本格的な復旧工事に取りかかろうとしていた矢先に奥能登豪雨で災害規模が拡大しました。設計のやり直しが発生したうえ、道路事情から現場まで片道3時間程かかる箇所もあり、未だ厳しい状況が続いています。

日本の国土は豊かな森に覆われ、山地災害は大幅に減少していますが、近年の気候変動を背景に、短時間強雨の発生回数の増加、線状降水帯の頻発などにより期間中の総降水量が増加するなど降水形態が変化し、災害が激甚化する傾向にあります。山地災害の発生形態も変化してきており、表層よりやや深い層からの崩壊や、流量増による溪流の浸食量の増加により、下流での甚大な土砂・流木被害を誘発しています。森林根系の及ばない深い地層からの崩壊（深層崩壊）は如何ともしがたいですが、表層型崩壊に対しては、災害に強い森づくりで被害を防止あるいは軽減させることが重要となっています。

森林はその根系を垂直方向、水平方向に、深く広い範囲に発達させることで土壌緊縛力を高め崩壊を防止する力が向上します。また、幹を太くし、根系による樹幹支持力を高めることにより、崩壊土砂を森林内に堆積させ、流下エネルギーを軽減させ下流

への被害を緩和させることが可能となります。さらに、地表の落葉層の形成は地表の雨滴浸食を和らげ、雨水を吸収し深層への影響を遅らせる効果もあります。こうした災害に強い森に仕立てるには、適地適木と適切な森林管理が基本となります。特に、土砂崩壊の発生源となる0字谷周辺では、手入れの良くない人工林は間伐で肥大成長を促し、光環境を改善し下層植生を育成し広葉樹の導入により針広混交林に誘導すること、また土石流の通り道となる溪流周辺では、多湿な環境を好む樹種の導入、育成などが有効と考えられます。人工林は災害に弱いから、すべからく広葉樹主体の多様な森に転換すべし、といった意見もありますが、まずは、現在ある森林状態を評価し、改良すべき箇所はどこなのかを特定し整備すること、また伐採後の森林再生では適地適木を第一に、下流周辺事情も十分考慮した森づくりを進める必要があると思います。

同じ年に地震、豪雨のダブルパンチ、加えて半島という地勢的に条件不利な事情が早期復旧を阻んでいる現状に心を痛めるばかりですが、「先輩、やるしかないですよ。」と気丈に語る後輩の言葉に救われます。能登地域の住民の方々や復旧・復興に携わる方々の頑張り、努力に思いを馳せ、一日も早い復興を祈るばかりです。

森林アドバイザー 川端省三



特集・森びと20年  
情報は「相互作用」の時代へ



足尾の植樹活動について初めて聞いたのは、当時のJR東労組を率いていた松崎明さんからでした。国鉄時代から労働運動のリーダーがなぜ植樹を？と思ひ、「組合は命を守るためにある」という信念からか、つまり樹木に宿る生命への畏敬であり、命を守るためにいる信念だったと思います。

「森びと」はその意思を受け継ぎ、あたかも足尾に植樹した木々のように、多くの人々が関わってきました。明日、どうなるか判らない、この地球において、それは希望の存在だと思ひます。



石破茂さんの総理就任という大きな政治変動の中、私たちが直面しているのは、経済問題や政治スキャンダルだけではなく、地球温暖化による気候変動は、私たちの生活を直接的に脅かす現実となっています。度々発生する自然災害、そして、異常に暑かった夏。その深刻度は年々増しているように感じます。

私たちの生きる情報環境も、また、その空気にあたるコミュニケーションの質や形が劇的に変化しています。情報の発信者、受信者と役割が違うことを前提に、マスコミュニケーションが存在していました。テレビ局や新聞社など圧倒的なメディアの力に比べ、私たちの存在は小さく、情報空間の空気は、マスメディアによって形作られていました。ところが、デジタル化に伴うネット、とりわけソーシャルメディアと言われるSNSの拡大によって、情報環境も劇的に変化を印象づけました。

コミュニケーション論において、ソーシャルメディアは、既存のマスメディアと違う「相互作用」を担うひとつとされています。一人ひとり、個人が発する情報が行き交うことで、真実に到達しようという相互作用こそ、ソーシャルコミュニケーションの特徴だと言われてきました。「真実に到達しよう」の「しよう」が重要なのです。

SNSの利用者であれば、ひとりのAさんの発信内容の真偽は、にわかには判らないと知っています。これにBさんが「いいね」しても、真偽は判りませんが、反対の情報を発信するCさんの出現。さらにDさん、Eさんと、さまざま意見が出て、やがて、真実にたどり着く。そのプロセスに、SNSの価値があるわけです。



「命を守る」というシンプルで判りやすい森びとの考え方は、こうしたSNSには格好のテーマだと思っています。まさに、木を植えて、森に育てるように、情報を発信し、真実に達しようという相互作用に親和性が高いと思うからです。発信者は、森びとが組織として公式に行うものに限りません。森びとのメンバー一人ひとりにも、発信ができるし、共感を広げる事ができるでしょう。それがきっと「命を守る」ことにつながるきっかけになると思うのです。会報だけでなく、ホームページ発信だけでなく、一人ひとりが苗木を植えるように、SNSに関わる年に。

広報アドバイザー 大山寛恭



## 森の仲間たち

### 足尾・松木郷を訪問・森の命を感じて！



私たち JR 東労組東京地本 OB 会は昨年 9 月 18 日、役員 5 名で「森びとプロジェクトの仲間の活動を学び、足尾の歴史を学ぶ研修」として足尾に訪問しました。現地に赴いたことはなく、期待と不安が入り混じる中での訪問でした。

最初に植樹を始めたころの様子と 10 年後の様子を写真で説明を受け、現在の状況を自分の目でみると木々は育っており、森を形成していることが分かりました。30℃を超える暑さでしたが森の中に一步入ると 3~4℃は低く、更には木々の呼吸さえ感じられるようで、植樹された箇所の説明を受けながら約 2 時間、足尾の森「松木郷の森」を歩き感じてきました。私たち以外によって植樹された箇所はありましたが、手付かずのためか成長が良くなく、日々の手入れの大切さを感じました。「みちくさ」に戻り、地元の子ども食堂のお弁当を頂いた後は、20 年間の取り組みの説明と意見交換を行いました。

「世界的規模の異常気象は地球温暖化が大きな要因であり、それは人間が作り出したこと。」「日本でも近年は暑い時期が長く短い春と秋。」「線状降水帯の発生や数十年に 1 度と言われながらも度重なる発生しているゲリラ豪雨や台風の発生。」「これらの環境の変化は私たちが作ってしまったものでした。私たちの手で森や木々を再生していく、継続していく取り組みの必要性を感じる訪問でした。

今後は OB 会として具体的に実践をしなければなりません。1 つ目は OB 会の取り組みとして継続することです。2 つ目は、この取り組みを OB 会役員

だけではなく OB 会員や現役組合員の一人でも多くの理解者を広めていきたいと思えます。

参加者全員初めてで不安がありましたが、今回の研修であらためて木々の大切さや森の役割の重要性を感じました。森は海の恋人とも言われています。私たちが育てた森を大切にしていきます。

JR 東労組東京地本 OB 会会長 小林富夫



昨年 11 月 9 日秋晴の中、私たち JR 東労組大宮地本 OB 会は、総勢 17 名で足尾の下草刈りのボランティア作業を行いました。今回、草刈りの場所は、2 年前に私たちが植樹した「りんねの森」と言われる川のそばで、当時は石ころと砂利の中で植樹を行い「こんな所で育つだろうか？」と疑問を抱きつつ行いました。大きく育ってはいないものの雑草にまみれて、懸命に生きている苗木に参加者は感動を覚え、作業に力が入りました。

今、地球は悲鳴が上げています。温暖化によって、海水温上昇、北極の解氷拡大、世界各地で私たちの命をも奪いかねない豪雨・森林火災等、自然災害が発生しています。「気候変動関連死」が近年注目され、温暖化が原因である事は明白です。いかに私たちは命を守り、未然に被害を抑制する減災のための対応が求められています。

足尾の植樹から間もなく 20 年を迎えます。今後も私たちは、「山と心に木を植える」を合言葉に、地球温暖化防止策のひとつの小さな手段としてボランティア作業・植樹を継続して行っていく事は勿論です。しかし、「ロートル化」が歪めない事実です。若手に取り組みを引き継ぎ、地域の知り合いに広め、森づくり活動の裾野を広げていく事が最大の課題です。

また、集中豪雨、熱射病など「気候変動関連死」防止策について、生活の周りの環境把握や各々の家庭で温室ガス効果削減行動について具体的に検討していく事が重要だと考え、早急に行動していきます。

JR 東労組大宮地本 OB 会会長 福田博之

## 森の仲間たち

### 森を育て広めていく重要性を学ぶ



私たちは JR 東日本社員および OB で構成されている東日本旅客鉄道労働組合（JR 東労組）に所属する「ネイチャークラブ」というサークルを結成し、自然を愛する仲間が集まり活動しています。

1999 年 6 月 4 日、ネイチャークラブ第 3 回総会第 4 回例会を岩手県八幡平で開催し、その際に出会ったのが宮脇昭最高顧問でした。「植物と人間の共生」をテーマに講演され、森づくりの熱意に感銘を受け「私たちにできることは何か」を考えさせられ、JR 東労組として森づくりの活動に参加していくこととなりました。

昨年 10 月 6 日、森びとプロジェクトのご協力をいただき「いのちを守る森づくりを始めて 20 年、人と森の成長を共に実感し、真実を見抜く目で本物をめざしていこう！」をテーマにネイチャークラブ第 28 回例会を足尾・白沢の森で開催しました。参加者から「12～13 年ぶりに足尾へ来たが、生長ぶりに感動した」「足尾も来たが大沼や青森の森づく



りを思い出し原点を感じた」「白沢が変わった！」「活動した成果があった」「元の姿に取り戻すのは大変」「八幡平より育ちが良い」「また数年後見に来るのも良いと思う」「森びとスタッフの熱を感じた」などの感想がありました。白沢が立派な森に変化していることを実感でき、地球温暖化に歯止めをかけるために森を育て広めていく重要性を改めて学ぶことができました。

私たちの身近な場所でも異常気象による被害が発生しています。青森県を走る JR 東日本津軽線蟹田～三厩間は 2022 年 8 月の豪雨による被害で 2 年以上不通が続き、復旧費用と利用者減少を理由に JR 東日本と自治体の間で廃止する合意がなされました。このように災害によって路線が廃止になる例はいくつもあります。異常気象により豪雨が発生し、線路や鉄橋が流される光景を私たちは何度も見ました。鉄路が無くなるということは、私たちにとっては働く職場も無くなるということです。そして、地域の移動手段が不便になることで地域の衰退が加速する懸念があります。鉄道がなくなるということは地域・社会に大きな影響を及ぼすことを避けることはできません。

私たちは鉄道というインフラを支える労働者として、乗客と仲間・家族のいのちを守る、鉄路を守るという視点を持ち続けるとともに、「ネイチャークラブ」としてもいのちを守る森づくりを共に進めていきます。

JR 東労組ネイチャークラブ会長 西垣栄義

## 森の仲間たち

### 足尾の繁栄と荒廃の歴史を繋ぐ「孤高のブナ」

昨年は元日の能登半島地震から何十年に一度といわれる猛暑や台風、線状降水帯からのゲリラ豪雨など、自然環境が大きく生活に影響した年でした。そのような異常気象が世界的にも起きている中、アメリカ大統領選挙では化石燃料の増産を掲げているトランプ氏が勝利し、再度パリ協定からの離脱も宣言しています。地球は近年の統計を見ても温暖化が進み、今ストップをかけていかなければ、将来に大変な問題をもたらすことは明白です。

私たちは自然を壊し、その回復力を上回る形で自然を利活用してきてしまいました。この自然破壊を止め、自然を再生していくことが将来もずっと続くよう持続可能な社会をつくっていかねばなりません。

中倉山ブナ保護に関わるようになって3年になりました。前日から山道の整備、植生袋への腐葉土分けなどを行い、当日はその植生袋を担ぎ上げ、ブナの根の周りに張り付けていきます。単に稜線に立つ「孤高のブナ」を保護するだけでなく、足尾の歴史を語り継いでいく活動でもあります。一昨年には

「孤高のブナ」の種を持ち帰り、発芽させた幼木である「希望のブナ」を植樹しました。1m程に生長した「希望のブナ」を担ぎ上げるために背負子に乗せましたが、大玉スイカ2個分はあるかと思われる大きさの根の重さに不安を覚えながら、葉を落とさず、枝をひっかかないように慎重に登ったことを覚えています。私は「孤高のブナ」のDNAを持つ「希望のブナ」が、引き続き足尾の繁栄と荒廃の歴史を繋いでくれるとの思いを託しました。この活動には、日光森林管理署の署長や高校生と先生、市民のボランティアも参加をしてくれており、拡がりを感じています。



今年、私は退職を迎えるので故郷に帰ります。冬はサンピラーやオーロラが見られる寒い街ですが、環境問題や自然保護に関しての活動を地元でも継続させていきたいと思えます。足尾での活動が多くの方々に知ってもらい、拡がっていくことを願っています。

神奈川県ファンクラブ 大津茂美



「孤高のブナ」保護活動

## 森の仲間たち

### 「孤高のブナ」保護活動に参加して

#### ●中倉山の「孤高のブナ」保護活動に参加して

当日は、前日までの荒天からうって変わって比較的暖かく朝から晴天となり、また紅葉も徐々に見ごろを迎えつつある絶好の「登山日和」で登山者も多く、話には聞いていましたが「孤高のブナ」の存在が大きく影響していることが実感されました。

登山道近傍の植生を眺めつつ歩いていましたが、林床の植生についてはやはりニホンジカの影響か、やや貧弱に感じたのと、ニホンジカの「角こすり」により樹幹が傷ついている樹木がやや目立ったように思います。各地の森林でニホンジカによる食害が問題となっていますが、その防除・駆除には多大な労力と費用を要する一方、特に山村地域においては狩猟免許を持つ方の高齢化・現象傾向が顕著になっています。今後のニホンジカ対策についてもいろいろと心配されるところです。

そんなことを見ながら、考えながらたどり着いて実際に「孤高のブナ」を見た第一印象ですが、「よくもまあ、こんなところに1本だけ残っていたものだ」というものです。ブナに限らず樹木、特に比較的高木となる植物にとっては、稜線上のような、風当たりも強く、水分環境もあまり良くない傾向の場所で単独で生き残ることは非常に困難を伴うものです。にもかかわらずこれまでこうして生き残っていたのを見ると、見る者が「何らかの意思」を感じてしまうのも無理からぬことだと思います。とはいえ、環境的には厳しいことには変わりはなく、森びとプロジェクトの皆さんによる保護活動が、「孤高のブナ」の生育環境の維持・保全に大きな役割を果たすことと思います。

「孤高のブナ」の近くにもう1本のブナの木が生育していることが確認されていますが、これら2本だけでは将来的に（おそらく、この周辺が昔はそうであったような）ブナの林を再現することは現実的にはなかなか困難なことと思います。森びとプロジェクトの皆さんにより、「孤高のブナ」の実生苗を現地に植栽し、シカ防護ネットにより食害を保護しつつ育成する活動も始まっていますが、今回の保護活動のような崩壊防止のための植生ネットの設置と



ともに、地道なブナの保護・育成活動により、中倉山の景観・植生の保全が一步ずつ着実に進んでいくことを祈ってやみません。

日光森林管理署長 中村昌有吉

#### ●中倉山の魅力

中倉山は、標高が1500m程度の山ながら3000m級のような特異の景観が広がっており、透明度の高い松木川や落広葉樹の森、絶壁の展望台、美しい稜線と変化に富んだ景色を楽しめる山です。また、駐車場からは3時間程度で山頂に到着することができます。危険箇所も少なく樹林帯の急斜面を登ると、どこまでも続く美しい稜線が待っており、ご褒美的な山旅を楽しむことができます。

と、ここまではガイドとして感じる山の魅力ですが、この中倉山の「孤高のブナ」は、他に類を見ない特別な場所だと感じております。

よく「登山は人生と一緒」と言われることがありますが、この孤高のブナに会うために、急斜面という困難を乗り越えながら、一步一步自分と向き合いながら登っていくと、そこには凛々しく立つブナが待っており、「このくらいで大変と断言してはダメだよ」と、まるで“人生の師”のような圧倒的な存在感のあるブナに会うことができます。

煙害によって荒れ果てた稜線で、困難を耐え抜いて生き続けている姿は、まさに登山者自らの人生を投影し、明日への活力を感じられる場所になっているのではないかと思います。

保護活動によって、次の世代に受け継いでいる中倉山のブナは、歴史の証人だけでなく、人生の師として、これからも多くの方に愛され続けて欲しいと願っております。

登山ガイド 松原美成子

## ファンクラブ通信

### 宮城県でつなげるいのちの森づくり



宮城県ファンクラブは、東日本大震災の津波で被災した海岸線に、海岸防災林を復旧・再生し、津波被害の軽減と、次世代に生態系豊かな森を、引き継いで行くことを目標に、森づくりを進めてきました。

2013年に仙台市荒浜・2014年に名取市閑上で植樹し、この地を「いのちの森」と名付け、ドングリや種を拾いポット苗を育て、その苗を補植するとともに、除草作業や下枝払いなどの、育樹活動を行っています。年2～4回の育樹活動終了後は、作業の労をねぎらいながら、感想を出し合い、地球温暖化についての問題意識を共有してきました。また、森の観察会を行い、木々の生長と森に支えられて生きていることや、緑の生命力と再生力を実感しています。

植樹してから10年が経ち、木々は大きく生長しており、落葉樹の落ち葉が地面を覆い、土壌分解生物によって土が作られ木々の根を支え、小さな森は猛スピードで生長しています。震災で被災した海岸

線に、緑豊かな森を蘇えらせ、命を守る森の防潮堤に育つことを願っています。

森づくりを通じて、「自然環境と命を大切にすることを育む」人づくりと、人間をはじめとした生物の生命の危機にある今、できることを実践し、未来を生きる子供たちと共に、「人に優しい自然環境と社会環境」を目指しています。しかし、地球温暖化は益々進行し、地球沸騰化となり、気候危機から「気候崩壊」へと加速しています。人間の活動によって、気温が上昇しすぎ、地球の回復力が失われるティッピングポイントに達してしまいます。地球温暖化による異常気象によって、引き起こされる災害で脅かされる命とくらし、そのような中で生きていく覚悟と、災害から命を守る心構えと備えが大切です。身近なところから危機意識を共有し、私たちがどう変われるか考えていかなければなりません。

宮城県ファンクラブ代表 林雄一

## 現地レポート

### いのちと生活を守ることを真剣に



昨年10月、10時から清水副代表、坂口スタッフとともに、市民団体などと明治神宮伐採反対行動に参加をしました。さかのぼること数日前、新宿区が事業者（三井不動産、明治神宮、日本スポーツ振興センター、伊藤忠商事）からの樹木伐採・移植の申請を許可し、樹木の伐採を強行するという知らせを受け、抗議の場に立ちたいと現場に向かいました。残念ながら、この日午後に樹木の伐採が始まりましたが、怒りをこぶしに込めてシュプレヒコールを行いました。

森びとでは、一昨年7月の第4回総会での会員の意見に基づき、運営委員会で議論を経て、東京都に「神宮外苑再開発による樹齢100年の樹木伐採に反対する意見書」を提出しました。要請文では「私たち人間を含む生物は、循環に支えられた森に生かされている」とし、森が持つ機能を「都民の命を守るもの」と指摘。再開発は「人類の生存を脅かす地球温暖化へアクセルを踏むもの」と強く批判しています。

市民団体が新宿区に対して違法である訴訟が起し、裁判は係争中であるにも関わらず、なぜ拙速に伐採をするのか。住民や市民への説明や対話が不十分であると批判も多い中のことです。2020東京オリンピック、前年開催のラグビーW杯開催で新国立競技場の建設にあたり、都営アパートの解体と強制退去が行われました。この時も東京都による住民への丁寧な説明はありませんでした。市民の声を無視して開発を進める傲慢なやり方はおかしいですし、自分の生活する地域のために声を上げることは当然のことです。まして、企業や一部利権を貪る政治家の金儲けのために、貴重な自然を破壊することや自分の生活を奪われることを黙っているわけにはいきません。政治家の力はもちろん必要ですが、市民が声を上げて行動することに共感し、今後も連帯した活動が必要だと感じています。

絶滅危惧種のレッドリストで知られる国際自然保護連合の報告では、世界中の樹種の3分の1以上が絶滅の危機に瀕しているそうです。そして、生態系の重要な構成要素である樹木は、炭素と水、栄養の循環や、土壌形成、気候の安定化など、地球上の生命の基礎を支える役割を担っています。人間も樹種のうち5,000種以上を建築素材として、2,000種以上を医薬品や食料、燃料として利用しています。私たち人間の生活に木（森）がなくなると、大きな影響が出てきます。私たちは、いのちと生活を守ることに對してもっと真剣に、遠くで起きていることではない当事者意識を持つことが必要ではないでしょうか。

運営委員 小林敬



<p><b>🌿 会員を募集しています。</b> <a href="https://forms.gle/AsNuTDi4X7pmkFSa8">https://forms.gle/AsNuTDi4X7pmkFSa8</a> <span style="float: right;">お知らせ</span></p>	
<p>2025年（毎年1月～12月末日まで）の森びと会員を募っています。ご入会（継続）いただける方は、下記をご確認の上、メールまたはファックスで お申し込みください。なお、すでに会員の方には払込取扱票を同封しています。</p>	
<p>会員種別</p>	<p><input type="checkbox"/> 正会員 1口 5,000円 ※事業運営の構成員として森づくりに自由に参画頂くメンバー。  <input type="checkbox"/> 賛助会員（個人） 1口 2,000円 ※森づくりを支えて頂くサポーター。  <input type="checkbox"/> 賛助会員（団体） 1口 10,000円～ ※運営を支える企業・法人のアドバイザー。                  ※機関紙を年2回お届けします。会費は、組織運営・活動経費に使用します。スタッフは原則ボランティアであり、人件費として使用されることはありません。会員の種別の詳細が不明な場合は下記にお尋ねください。                  ※個人情報につきましては当委員会が責任を持って適正な管理を行うとともに、個人情報の保護に努めます。</p>
<p>申込方法</p>	<p>右上 QRコードからの申し込み専用フォーム、または、会員種別、住所、氏名、生年月日、性別、電話、メールアドレスを記載の上、Eメールまたは FAX で、森びとプロジェクトまでお申し込みください。</p>
<p>振込先</p>	<p>ゆうちょ銀行振替口座：00140-2-364527                  他金融機関からの振替用口座：店番 019 当座 口座番号 0364527                  森びとプロジェクト                  ※大変恐縮ですが振込手数料はご負担ください。</p>
<p><b>🌿 森びとカルタを募集しています。</b> <a href="https://forms.gle/bSem749FJKT48b2P9">https://forms.gle/bSem749FJKT48b2P9</a></p>	
<p>森づくり 20年を記念し、これまでを振り返り森の大切さを共有するための「森は友だち！」かるたを作ります。森づくりと同じく、たくさんの方の手でこのかるたづくりを行いたいと考え「森は友だち！」かるたの読み札を大々的に募集したいと思います。森びと会員や関係者はもちろん、森づくりや自然に関わりがある人、これから関わりたいと考えている人、どなたでも参加できますので、ぜひ、「森は友だち！」かるた作成にご協力ください。</p>	
<p>申込方法</p>	<p>右上 QRコードからの応募専用フォーム、または、氏名、ニックネーム（任意）、読み札、読み札（よみがな）、住所、連絡先を記載の上、Eメールまたは FAX で、森びとプロジェクトまでお送りください。</p>

## 編集後記

今年はいよいよ森づくり 20周年！という理由で、なのかは定かではありませんが、今回は頑張って 20 ページといういつもより多めのボリュームでお届けしました。いかがでしたでしょうか。

20年という歳月は、人で言えば成人を迎える長さですが、森の時間という視点では、まだ歩き始めた程度のタイミングなのかもしれません。これからどんな森になっていくのかとても楽しみです。

とは言え、私たちがきっかけを作ったこの森は、

すでに多くの生き物の「避難所」となり「キッチン」となり、そして「貯蔵庫」にもなりつつあります。この先もますます豊かになる足尾の自然回復に大きく役立つことは間違いありません。

これからも、少しでも更に木を植えられるよう、そして大きく育ったこの森をもっともっとたくさんの人に見てもらえるよう、皆さんと一緒に森づくりを続けていきたいですね。

運営委員 小黒伸也



森の木魂(こだま) 第14号 (2025年1月24日発行)



発行：森びとプロジェクト  
 発行人：桜井勝延  
 編集人：森びとプロジェクト編集委員  
 第一版

〒141-0031  
 東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室  
 TEL&FAX 03-6417-3750  
<http://www.moribito.info/>  
 Email [info@moribito.info](mailto:info@moribito.info)

